

4 月第 4 週の礼拝説教

■日 時：2023 年 4 月 23 日（日）10：30－11：30 復活節第 3 主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「あなたがたに平和があるように」

■聖 書：ルカによる福音書 24 章 36～43 節（新約 p161）

■讃美歌：120 「主はわがかいぬし」
323 「喜び祝え、わが心よ。」

本日取り上げるルカによる福音書 24 章 36 節からは「弟子たちに現れる」という見出しがつけられています。けれども、ここは 28 節からの一続きの話ですから、前半の出来事を確認しておきましょう。パンを裂いておられるお姿を見て主イエスだと分かり、主イエスの復活を信じた二人の弟子たちは、時を移さず出発してエルサレムへと戻って行きました。彼らは日暮れにエマオに着いたのです。そして、それまで一緒に歩いてきた主イエスを「**一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから**」と無理に引き止めるほどに、彼らは疲れていたのでしょう。しかし、主イエスの話を聞き聖書の説明を聞いたときに心が燃えた経験をした二人は、その経験を一刻も早くエルサレムに残っている弟子たちに伝えたくて、その村に泊まることなく夜の間に来た道に戻って行ったのです。聖書の説明を聞き、その御言葉によって「心が燃える」という経験をすること、それはその人々を根底から揺るがすほどのものであるということが伝わってきます。私はこの箇所を読むときにいつも、ルカによる福音書の著者もまたそのような経験をしたのではないかと思うのです。そして今、この礼拝において同じ御言葉に触れている私たちもまた、静かに心が燃えて自分自身の歩みが根底から揺さぶられているはずです。私たちがこの礼拝から戻る場所は朝出てきた日常の生活なのですが、私たち自身は大きく変えられていると信じています。

さて、二人がエルサレムに戻って他の弟子たちの所に行ってみると、十一人の弟子たちとその仲間たちが集まっていました。34 節に「**本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた**」とあります。シモンとは主イエスの一番弟子のペトロのことです。ペトロは 12 節によれば、婦人たちからの知らせを聞いて自分も主イエスの墓に走って行き、その中に遺体を包んでいた亜麻布しかないことを確認しました。しかし「**この出来事に驚きながら家に帰った**」とありますから、彼も様々な思いで心が揺れ動いていたといえるでしょう。そのペトロに主イエスご自身が現れて下さったのです。その具体的な様子は聖書に記されていませんが、ペトロも何らかの形で復活した主イエスとの出会いを与えられたのです。弟子たちはシモンからその話を聞き、それについて話していました。エマオから戻った二人も「**道で起ったこと**」、つまり主イエスが共に歩みつつ聖書を説き明かして下さったのに自分たちはそ

れが主イエスだと気付かなかったこと、そして「パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第」を皆に話したのです。本日の聖書箇所は36節はその続きとして「こういうことを話している」と書き出されているのです。35節と36節はそのように直接つながっており、同じ場面の続きなのです。そこに、「イエス御自身が彼らの真ん中に立ち」ということが起りました。主イエスの復活について夢中になって話している彼らの真ん中に、当事者である主イエスご自身が立たれたのです。そして「あなたがたに平和があるように」とおっしゃったのです。その時の様子を37節では「彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った」と記しています。並行記事であるヨハネによる福音書20章19節は、より詳しくその場面を描いています。「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。」とあります。彼らはその時、まさに、主イエスが復活してシモンに、また二人の弟子たちに現れて下さったことを話していたのです。そこにシモンも二人の弟子たちもいました。つまり復活した主イエスを自分の目を見た人が三人もいたのです。それなのに彼らは、恐れおののき、亡霊を見ているのだと思ったのです。それまで語り合っていたことは何だったのか、特に復活の主と出会った三人の人々の証言は何だったのか、と私たちは考えてしまいます。けれども、まさにそれこそがキリスト教の現実の姿なのです。主イエスの復活は、生きておられる主イエスと出会った人にとってすら、あるいはその人々の目撃証言を聞いた人にとってすら、それを本当に信じるのができないような事柄なのです。聖書はそれを真正面から描き、それを読んでいる後の世代の私たちに、あなたはどうか、と問いかけているのです。

しかし、この話は復活を信じることの困難さだけを語っているわけではありません。37節に「彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。」あります。「亡霊」と訳されていますと、主イエスの幽霊が現れたと恐れおののいているというように読めますが、原文は単に「霊」という言葉です。「霊を見ているのだと思った」のです。つまり彼らは、主イエスの霊が肉体を伴わずに現れたと思ったのです。38節から43節に描かれている主イエスの言動は、そういう弟子たちの間違っただけの思いを正すために語られています。39節の「わたしの手や足を見なさい」という主イエスの言葉は、足のあるなしで幽霊かそうでないかを判断するという日本的な感覚で理解するものではありません。主イエスは、私は幽霊ではない、と言っているのではなくて、私は肉体をもって復活したのだ、霊のみで現れているのではない、と言っておられるのです。そのことを彼らにはっきりと分からせるために、「イエスは手と足をお見せになった」のであり、「焼いた魚を一切れ差し出すと、イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。」と描かれています。主イエスがそのようなパフォーマンスまでなさって示されたこと、それは、主イエスの復活は、霊のみにおける事柄ではなくて、肉体の復活だったのだ、ということです。ルカによる福音書が記された時代よりもはるかに科学が進歩している今、私たちは復活を信じるのが本当に困難な時代を生きています。復

活を肉体におけることとしてではなく霊における事柄とするならば、それほどの難しさはありません。主イエスは霊において復活して弟子たちの前に現れた、ということならば、誰でもすんなり受け入れられるのではないのでしょうか。しかし聖書は、特にルカによる福音書のこの箇所は、そのような捉え方を拒んでいます。主イエスは、手と足を持ち肉や骨のある肉体として復活して、弟子たちの前に現れたのです。そして、繰り返しになりますが、彼らの真ん中に立って、「あなたがたに平和があるように」と語りかけられたのです。これはユダヤ人たちが毎日普通に交わしている挨拶の言葉「シャーローム」だと言われています。しかし、主イエスはここで単なる日常の挨拶を語られたわけではありません。弟子たちの群れに、神の平和、祝福が豊かにあるようにという思いを込めてお語りになったのです。そこから始まった神様の平和は、主イエスが体をもって復活なさったことを信じる信仰によって私たちにも与えられるのです。今また、遠いアフリカのスーダンで戦闘が激しくなったというニュースが流れています。先週はTVのニュースで、命の水を求めて戦火の中をさ迷い歩く人々の映像を見ました。そのような中で私たちは、遠くで起こっている出来事に対しては漠然とした「霊」の働きを祈ることしかできない思いがちです。しかし、すべての争いや戦いの発端は、私たちの身近な憎しみや妬み、恐れや不安から生じています。それをしっかりと自覚しながら、主なる神様の平和が現実のものとして実現するようにと祈り続けてまいりましょう。